

令和 7 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K03437

研究課題名（和文）発達障害特性のある大学生の認知的柔軟性を考慮した介入プログラムの妥当性

研究課題名（英文）Validity of an intervention program considering the cognitive flexibility of university students with developmental disabilities.

研究代表者

篠田 直子（Shinoda, Naoko）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：00758948

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：対面とオンラインを融合させた現介入プログラムの実施は困難となったため、オンライン介入プログラムを効果的に継続できる要因に関して検討した。不安低減セッションを追加したプログラムの実施、自己受容、精神的健康との関連、発達障害特性の包括的把握、インフォーマル支援の可能性の5点について量的に検討した。その結果、愛着の問題や障害特性によって自己肯定感が低く不安の高い学生を対象とする場合、発達障害特性を診断名や診断の有無ではなく包括的に特性を捉え正しく自己受容する必要があり、簡便なチェックリストとチェックリストで把握した特性とテーマとしたセッションが必要であることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

COVID-19の流行以降、発達障害者に対するオンラインによる介入プログラムが各国で実施されているが中断率が高く課題が残る。本研究では、その背景としてオンラインによる知識伝達型プログラムの参加者の不安への対処が不十分であるためであることが示唆された。不安は物事を柔軟にとらえる力や自分の特性への直面化回避と関連しており、特性としての弱みへの対処をグループで話し合う場が必要であり、話し合う材料として既存の質問紙ではなく自分の特性を包括的にニュートラルにとらえるチェックリストとそれと向き合うセッションの必要が示唆されたことは、発達障害特性のある学生や青年への持続的な介入プログラム開発に意義がある。

研究成果の概要（英文）：As it has become difficult to implement the current intervention program that combines face-to-face and online sessions, we investigated factors that can effectively continue the online intervention program. We quantitatively examined five points: 1) implementing a program that adds an anxiety reduction session, 2) self-acceptance, 3) the relationship with mental health, 4) comprehensive understanding of developmental disorder characteristics, and 5) the possibility of informal support. As a result, it was confirmed that when targeting students with low self-esteem and high anxiety due to attachment problems or disability characteristics, it is necessary to comprehensively grasp the characteristics of developmental disorders and correctly accept themselves, rather than just the diagnosis or the presence or absence of a diagnosis, and that a simple checklist and sessions based on the characteristics and themes identified through the checklist are necessary.

研究分野：臨床心理学

キーワード：発達障害特性 介入プログラム 不安 インフォーマル支援

## 1. 研究開始当初の背景

発達障害特性のある大学生への支援の一環として、特性のある者に対する介入プログラムの重要性が指摘されている。しかし、特性の強い者の中断率の高さや効果の持続、さらには遠隔対応のためのオンライン実施に関しては、十分な報告が得られていない。

篠田他(2016)は、障害特性、特に不注意、多動性・衝動性に加えて認知的柔軟性の弱さなど実行機能を考慮したワークショップ(介入プログラム)を開発、対面とオンラインで実施し、効果的な介入プログラムの要因を模索してきた。その結果、効果的な介入プログラムには、特性を可視化した資料を提示すること、知識は自分の特性との関係で実体験による実感として理解していくこと、集団の力を使い弱みをリフレーミングする力を養うこと、小集団のポジティブフィードバックにより自己肯定感の低下を防止し自己受容を促すことなどの要因、また、グループの組みにくさやファシリテーターの質の確保などの課題が指摘された。特に、複数のキャンパスに分かれている大学では、各キャンパスをつないだ介入プログラムの実施が必要とされているが、全員が別々の場所から集う形でのオンラインプログラムの効果と課題について十分なエビデンスは得られていない。そこで、対面型と完全オンライン型の介入プログラムを比較することで、オンラインに効用と限界を把握することを目的としていた。

ところが、研究開始と同時に COVID-19 が蔓延し、対面での介入プログラムの実施が困難となった。一方で、オンラインによる知識伝達型のプログラムが多数実施されるようになった。そのため、オンラインによる介入プログラムに影響を与えると思われる要因の確認が喫緊の問題となっている。

## 2. 研究の目的

開発済みの ADHD 特性および認知的柔軟性の弱さと実行機能を考慮した介入プログラムのオンライン実施において、継続的な参加を可能にする要因、効果を持続するための要因等を検討する。特に、介入プログラムの中で発達障害特性の強い学生から語られる“不安”について、大人の愛着との関連、自己肯定感を支える自己受容の在り方、発達障害特性を診断に関係なく包括的、および簡略にとらえるためのチェックリストの作成を目的とした。

## 3. 研究の方法

### 1) 愛着の課題を考慮したオンライン介入プログラムの実施

ASD 又は ASD 傾向を有する学生の認知・社会面に加え、愛着形成の課題も想定し、情緒面の支援も加えた介入プログラムの開発を試みた。なお、COVID-19 の感染拡大に伴いオンライン授業が中心となり、介入プログラムもオンライン化が求められた。すでに、従前のプログラムで遠隔対応の取り組みもなされていたが、今回は、参加者の受信環境を考慮し、その短縮版の試行と効果の検討を目的とした。

#### 【プログラム参加者】

2020 年 4 月下旬に、予備調査として、都内私立大学心理学部に通い臨床心理学関係の演習を受講する大学生 16 名を対象に AQ-J、ECR-G0、さらに、ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版(桜井, 2000)、不安尺度(篠田・沢崎・篠田, 2015)を実施した。そのうち、大学 3 年生(女性) 8 名(平均年齢 20.25, SD=0.43)に口頭および書面にてインフォームドコンセントを行い、介入プログラム参加への同意が得られた者を参加者とした。

#### 【介入プログラムの手続き】

参加者は、効果測定(事前)用の質問紙に回答したあと、4 人ずつ 2 グループに分かれ、情緒面および認知・社会面に焦点をあてた 2 つのセッションの順序を入れ替えて実施した。2020 年 6 月第 1 週から毎週 1 回 90 分のオンライン・プログラムを 2 回実施後、効果測定(事後)として質問紙に回答した。さらに、約 1 か月半後にフォローアップセッションを 8 名全員で 1 回(90 分)実施した。参加者は自宅から可能な限り音声・画面を共有する形で Zoom に参加した。

#### <グループワークの概要と特色>

情緒面の支援に焦点を当てたセッションでは、「安心の基地・安全な避難所づくり」をテーマに、コロナ禍の大学生活に関する困り感およびその対処法の共有を行い、安定した愛着を体験できる休憩の機会を確保することで、不安の軽減を図ること意図した。一方、認知面の支援に焦点を当てたセッションでは「自分のクセにあったプランニングスキルアップワークショップ(篠田ら, 2013)」の中から、計画の切替をテーマに、プランニングの基礎である PDCA サイクルの概念、特に計画の切替スキルの獲得を意図した。その際、自身の認知や行動のクセ、特に認知的柔軟性を考慮した自分に合ったプランニングスキルの獲得を目指した。両セッションとも、参加者各人がそれぞれ異なった特徴や考えを持つことを肯定的にとらえポジティブフィードバックを行うことにより、プログラムにおける不安の低減に努めた。フォローアップセッションでは、プログラム後の状況について自由に話し合い、不安の低減やスキルの定着の状況を確認した。

## 2) 一般大学生の自己受容に関する研究

内省が高い人々に焦点を当て、自己受容プロセスの「否定的な自己認知」における「自分と向き合う」過程について質的に検討した。

### 【インタビュー参加者】

2022年10～11月に縁故法により実施した質問紙調査から、インタビュー調査への協力意思を示し、かつ以下2点の条件を満たす者14名(男性7名、女性7名)を対象とした。

条件1: 質問紙調査の省察尺度得点の平均が3.75以上である

条件2: 自己受容尺度において、自己のある側面について「気に入らない/やや気に入らない」を選択後、「受け入れられる/やや受け入れられる」を選択した項目が1つ以上ある

### 【インタビュー期間】2022年10月下旬～11月上旬

【データの収集方法】インタビューガイドを用いて対面で、もしくはオンラインで30～90分程度の個別インタビューによる半構造化面接を実施した。記録は参加者の承諾を得てICレコーダーにて録音し、逐語録を作成した。

【データ分析方法】インタビュー調査データの分析方法として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を採用した。本研究の焦点は臨床心理学領域で研究されてきた「自己受容の過程」であり、ヒューマン・サービス領域、社会的相互作用性、プロセス的特性というM-GTAの適性に合致しているため、分析手法として妥当と判断した。

【分析手順】分析テーマを「内省の高い人々が迎える自己受容のプロセス」とし、分析焦点者を「内省得点が高く自己受容している大学生」とした。木下(2020)が示すM-GTAの分析手順に従って、分析を行った。

## 3) 大学生の発達障害特性と精神健康との関連に関する質問紙調査

介入プログラムで使用する発達障害特性の簡易版包括的発達特性チェックリストを作成するための予備調査である。対象を大学生に絞って限定的に調査を実施した。

### 研究1

ASD特性が愛着形成と適応様態を通して最終的に精神健康に与える影響について検討するため、大学生110名を対象に、自閉症スペクトラム指数(AQ;若林他,2004)、ECR-G0、大学生用過剰適応尺度、GHQ精神健康調査票(GHQ-12;中川・大坊,2013)の関連を検討した。

【目的】青年期にある大学生を対象として、ASD傾向と適応様態の関連に加え、育ちと密接な愛着スタイルにかかわる要因を加味した検討をさらに掘り下げて行うことで、その心理臨床的支援に有効な手立てを探索し、発達障害学生の修学支援の一助とすることを目的とした。

### 【方法】

調査対象: 都内私立大学心理学部の110名(男性28名、女性80名、その他1名、回答しない1名)を分析対象とした。平均年齢は20.38歳(SD=1.25)であった。

調査期間: 2023年11月～12月

調査手続き: 大学での講義の冒頭または講義の終了後に、当該講義担当講師の許可の下で受講生にGoogleフォームにて作成した質問紙のURLを配布した。質問紙の冒頭で確認事項を提示し同意が得られた者に回答を求めた。所要時間は15分程度で、回答が終わった時点で各自終了とした。

調査項目: ASD特性(50項目4件法): 自閉症スペクトラム指数(AQ;若林他,2004)、過剰適応(31項目5件法): 大学生用過剰適応尺度(石津・斉藤,2011)、愛着(30項目7件法): 一般他者に対する愛着スタイルを測定する尺度(ECR-G0;中尾・加藤,2004)、精神健康度(12項目4件法): GHQ精神健康調査票(GHQ-12;中川・大坊,2013)

### 研究2

大学生のASD特性が過剰適応や社会的カモフラージュ行動を通してメンタルヘルスに与える影響について、質問紙調査を実施した。

### 【目的】

大学生のASD特性によって獲得された愛着スタイルが適応行動を通してメンタルヘルスにどのような影響を与えているかについて検討した。

### 【方法】

都内私立大学心理学部の1～4年生110名(男性28名、女性80名、その他1名、回答しない1名: 20.38±1.25歳)を対象に2023年11～12月に質問紙調査を実施した。

Googleフォームにて作成した質問紙のURLを縁故により配布し、調査協力者を求めた。所要時間は15分程度で回答が終わった時点で各自終了とした。使用した質問紙は、自閉症スペクトラム指数(AQ;若林ら,2004)、大学生用過剰適応尺度(石津・斉藤,2011)、一般他者に対する愛着スタイルを測定する尺度(ECR-G0;中尾ら,2004)、社会的カモフラージュ行動尺度(CAT-Q;本郷ら,2020)、GHQ精神健康調査票(GHQ-12;中川・大坊,2013)であった。

## 4) 青年期・成人期初期における発達障害特性の包括的把握に関する研究

ADHD特性をもつ人(診断閾値下を含める)の青年期・成人期初期における発達上の特徴について、他の発達特性の併存との関連を明らかにする。

## 【目的】

一般の青年期から成人期初期にある人を対象として発達特性に関する自記式調査を行い、発達特性の重複や、メンタルヘルスとの関連性について検討した。

## 【方法】

18歳から29歳までの397名(男性199名,女性198名:24.42±3.32歳)を対象に,2025年3月に質問紙調査を実施した。クラウドソーシングサービスを用いて研究協力者を募集し,WEB調査を実施した。調査で使用した尺度は,PHQ-4(Kroenke et al.,2009),GHQ12(中川・大坊,1985),AIS日本語版(岡島ら,2013),DSM-5TR,AQ日本語版・成人用(若林ら,2004),青年期版不器用さの自己認知尺度(林ら,2017),大学生学修困難尺度(LDSP28)(高橋・三谷,2019),感覚過敏尺度短縮版(花弥・伊藤,2024)

### 5) 発達障害特性のある大学生へのインフォーマル支援の現状に関する調査

発達障害特性のある学生の支援の一環として,発達凸凹のある学生に対するインフォーマル支援の現状について質問紙調査を実施した。特徴は,診断閾値以下の学生への支援に着目し,それらの学生への一般学生の支援行動や考え方を質問紙調査において確認した。

#### 【目的】

障害学生支援に関する理解・経験・支援意向,発達障害や発達凸凹のある学生へのインフォーマル支援の実態及び支援意向について把握する

#### 【方法】

対象者:大学生 60名程度

調査時期:2024年11~12月

手続き:質問内容はインターネット上にgoogleフォームを用いて公開し,縁故法および授業前後でURLを配布することで調査協力者を求める。大学の科目担当教員に依頼してインターネットページに質問フォームのリンクを掲載してもらうか,講義中に質問フォームのQRコードを貼り付けてもらう。なお,質問紙への回答は授業時間外とする。質問紙の冒頭で調査への同意をとり,同意が得られた人のデータを収集する。所要時間は10~15分程度で回答が終わった時点で各自終了とする。調査協力による報酬は付与しない。

調査票の内容:

法律・概念の理解度(障害者差別解消法,合理的配慮),現在実施されている合理的配慮の適切性,「発達凸凹」の認知,「発達凸凹」の理解,「発達凸凹」のある人との接点,「いる」と回答した場合,その関係性・発達凸凹学生へのサポート経験,事例提示によるインフォーマル支援の必要性・支援意向とその理由・個人として可能ある支援・支援対象と関係が近い場合の支援意向,デモグラフィック項目(年齢・性別・学部・学年)

## 4. 研究成果

### 1) 愛着の課題を考慮したオンライン介入プログラム

ASD傾向および愛着の不安定さが確認された参加者において,オンライン上での単回セッションであっても,親密度を高め,孤立感を低減させる居場所の提供に繋がる可能性が示唆された。参加者全体の尺度得点変化から,プログラムの実施により,コミュニケーション尺度における「親しい人との関係」において,相互の心的距離が縮まったことが確認された。すでに,従前のプログラムでは,ウォーミングアップに,情緒的な配慮として親密度を高め緊張を緩和するエクササイズを導入していたが,独立してセッションを行うことの効果については,より実験計画を統制して行う必要がある。今回,小集団内によるグループワークの効果として,親密度を高め,修学上の困難さを共有できる機会は,孤立を避ける安全基地としての休憩機会につながる可能性が示唆された。認知面の得手不得手といった自己評価の修正も促され,自身にあった対処戦略を志向する機会の提供につながる可能性を見出すことができた。しかし,オンラインにおける間接的なコミュニケーションという制約下では,必要なフィードバックを同時には得難い。よって,その運用には慎重を期すべき側面があり,個別の支援は欠かせないと考えられた。

### 2) 一般大学生の自己受容

以下のようなストーリーラインが確認された。自己のある側面について否定的な捉え方に至るには,特定の出来事である〔挫折の経験〕や不特定の 日常で感じる齟齬 がきっかけとして存在する。これらの体験を経て,自分の【欠点と向き合わされる】こととなり,こころの揺れが生じる。こころの揺れは時として,憧れや妬ましさといった【持てる他者への眼差し】を生み,自責をさらに浮き彫りにしていく。自己に対する否定的認知の咀嚼は【柔らかく捉え直す】ことが中核となる。欠点自体,それを取り巻く状況,出来事の結果,そして過去の自分など,リフレーミングの対象は多岐にわたる。さらに,そうした個々の事象について考えると同時に,自分とは何か という自己全体への問いを繰り返す。この問いは自身一人で完結することではなく,社会の中で生きるということ という視点を取り込みながら,【自己理解と他者理解の循環】を生む。そして,自己理解を経て見えてくる一つの方向が【理想論と現実の歩み寄り】である。程遠い理想像について,自分に諭す ように,現実的な落としどころを見つけていく。その中で,「このままの自分でも良いかもしれない」という 自分を受け入れられる 感覚に至る。一方,自己理解の先には【欠点と向き合い続ける選択】も存在する。社会的視点や 経験則の参照により,「このままで良い」とはとても思えないまま,積極的に自分を受け入れない という選

択を採る。その最中には、行動変容のための 試行錯誤の積み重ね という、主体的な試みがある。そして、この【理想論と現実の歩み寄り】と【欠点と向き合い続ける選択】は決して個々の目的地ではなく、その先を見据えた動力のあるプロセスであり、受容と非受容の共存 受容と非受容の往来 という形をとりながら、絡み合っていて進んでいく。

以上より、柔らかなりフレーミングと自己理解の調整がメンタルヘルスに影響を与えており、その背景に、他者の存在も確認できた。

### 3) 大学生の発達障害特性と精神健康との関連

#### 研究 1

媒介分析を行なったところ、見捨てられ不安および自己不全感が ASD 特性と精神健康度との関連について完全媒介を示し、ASD 特性は特性そのものが精神的健康に影響を与えるのではなく、ASD 特性によって引き起こされる自己への不安によって影響されることが確認された。自由記述では、過剰適応の過程では、自己への不安感が他者への不安感(評価懸念等)と照合されてより増幅される動的過程が進行していくことが推察された。育ちや適応行動の中で生じた自己への不安を感じている者や、他者との関わりを回避する者に対して、安心・安全な関係性や居場所の確保をし、その上で適応行動がストレスや疲労の増幅につながらないように自己管理スキルの向上を促す支援が必要と考えられた。

#### 研究 2

精神健康に与える適応行動の影響は、「自己不全感(  $\beta = .416^{**}$  )」と「期待に沿う努力(  $\beta = .284^*$  )」のみであり(  $\text{adj}R^2 = .393^{***}$  ), 社会的カモフラージュの各下位尺度はいずれも影響を与えていなかった。次いで、「自己不全感」と「期待に沿う努力」を従属変数、愛着および ASD 特性を独立変数として順次投入して階層的重回帰分析を行った結果、「自己不全感」には、愛着のみ(「見捨てられ不安」(  $\beta = .527^{**}$  )、「親密性の回避」(  $\beta = .385^{***}$  ))が正の影響を与えていた(  $\text{adj}R^2 = .441^{***}$  )。一方、「期待に沿う努力」には、愛着(「見捨てられ不安」(  $\beta = .531^{***}$  )、「親密性の回避」(  $\beta = .172^*$  ))に加えて、社会的スキル(  $\beta = -.294^{***}$  ), 注意の切替(  $\beta = .172^*$  ), コミュニケーション(  $\beta = -.217^*$  )などの ASD 特性が影響を与えていた(  $\text{adj}R^2 = .399^{***}$  )。

以上より、ASD 特性によって引き起こされた愛着の問題(見捨てられ不安や親密性の回避)は、自己不全感および期待に沿う努力などの過剰適応行動につながり、その結果、メンタルヘルスの悪化が予測された。一方、社会的カモフラージュのメンタルヘルスに与える影響は確認できなかった。

### 4) 青年期・成人期初期における発達障害特性の包括的把握に関する研究

ADHD 特性はいずれの尺度とも弱～中程度の相関を認めた。GHQ-12 と PHQ-4 は発達特性のいずれの尺度とも弱～中程度の相関を認めたことからメンタルヘルスとの疑似相関が疑われたため、PHQ-4 を制御変数とした偏相関を算出した。全体的に相関係数は低下したものの、ADHD 特性は AQ の社会的スキルと弱い負の相関(  $r = -.272, p < .001$  ) 細部の関心と弱い正の相関(  $r = .306, p < .001$  ), 感覚過敏、限局性学習症(SLD)特性、微細運動と弱～中程度の正の相関が示された(  $r = .293 \sim .478, p < .001$  )。不注意と多動・衝動性によるクラスター分析では、カットオフ値以上(混合型)、グレーゾーン(混合型)、グレーゾーン(不注意優勢)、特性なしの 4 群が確認された。4 群比較では、ADHD 特性が強いほどメンタルヘルスや他の発達特性尺度の得点も高く、特に混合型はカットオフ値以上だけではなくグレーゾーンでも得点が高かった。

以上より、ADHD 特性がある場合 ASD だけでなく SLD や DCD など他の発達特性との重複について評価していく必要がある。また、診断閾値下であっても一定の困難さを有しており、診断の有無や一特性にとどまらず、発達の諸特性を包括的に評価することが欠かせない。今後は、包括的に発達特性を評価するための多元的な指標の活用が求められる。

### 5) 発達障害特性のある大学生へのインフォーマル支援の現状に関する調査

「合理的配慮」や「発達凸凹」という言葉を知っている人は多くいるものの、その定義や詳しい内容まで知っている人は少ないこと、実際に行われている合理的配慮にも適切であると感じにくいものがあること、身近に発達凸凹のある人がいてもサポートまではできていない人が多いこと、援助経験がある人は、ない人に比べて援助意欲が低く支援する相手との親密度が高い場合の方が、低い場合よりも援助意欲が高いこと等が示唆され、ナチュラルなインフォーマル支援を進めるためには、顔の見える支援、支援のハードルを下げる、発達凸凹理解普及を進めることが重要であることが占められた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中村梓希・篠田直子	4. 巻 22
2. 論文標題 自己受容における「自分と向き合う」過程の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 信州心理臨床紀要	6. 最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森光晃子・山崎暁・高橋勇・高橋徹・篠田直子	4. 巻 16
2. 論文標題 信州大学における新型コロナウイルス下のオンライン授業 - 情緒・認知面の支援を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信州大学総合人間科学研究	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 刈田恵介・篠田晴男・篠田直子	4. 巻 19
2. 論文標題 A S D傾向を有する大学生の修学支援ニーズとオンライン・グループワークの試みー情緒・認知面の支援を中心にー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立正大学臨床心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 篠田晴男・篠田直子	4. 巻 4
2. 論文標題 精神・発達障害のある学生のインフォーマルな成長支援とアセスメントー発達障害の併存がある・疑われる学生の支援を中心にー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立正大学障害学生支援室年報	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 篠田直子・中村梓希
2. 発表標題 精神的自己受容に関する一研究
3. 学会等名 カウンセリング学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠田直子・篠田晴男・篠田菜々
2. 発表標題 注意欠如多動傾向のある大学生の自己受容の特徴
3. 学会等名 児童青年精神医学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naoko Shinoda・Haruo Shinoda
2. 発表標題 An attempt to support undergraduates with learning problems caused by failure of executive functions
3. 学会等名 International Congress of Psychology, The 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoko Shinoda, Haruo Shinoda, Kurumi Murayama, Nana Shinoda
2. 発表標題 Relationships of ASD traits, Attachment, Soscil camouflaje, and mental health in undergraduates
3. 学会等名 ICP2024 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 村山 来海・石井 正博・篠田 晴男・篠田 直子
2. 発表標題 ASD傾向を有する大学生の修学支援にかかわる愛着スタイルと適応様態に関する検討
3. 学会等名 日本LD学会第33回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 篠田菜々・篠田晴男・篠田直子
2. 発表標題 大学生のASD特性が過剰適応や社会的カモフラージュ行動を通してメンタルヘルスに与える影響 愛着を手掛かりにしてー
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会 第65回総会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nana Shinoda , Naoko Shinoda , Haruo Shinoda , Eiji Shimizu
2. 発表標題 Comorbid problems of ADHD traits and other developmental traits in general university students: a pilot study
3. 学会等名 10th World Congress on ADHD - ADHD Congress ( 国際学会 )
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 篠田晴男・篠田直子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 三恵社	5. 総ページ数 129
3. 書名 大学生生活と成長支援ー発達障害学生支援の覚書ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	篠田 晴男  (Shinoda Haruo Haruo)  (90235549)	立正大学・心理学部・教授    (32687)	
研究分担者	高橋 知音  (Takahashi Tomone)  (20291388)	信州大学・学術研究院教育学系・教授    (13601)	
研究分担者	森光 晃子  (Morimitu Akiko)  (10468986)	信州大学・学生相談センター・助教(特定雇用)    (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関